

A detailed illustration of a blonde elf woman with large, prominent breasts. She has long, straight blonde hair with bangs and pointed ears. She is wearing a green strap that crosses her chest. The background is a light blue gradient.

ローロス島戦記

～ヒロイン陵辱集～

IV

金髪エルフの愛液

「あらすじ」

ザクツンの村に滞在していたパロンが、今までの魔術師としての経験から話をして聞いたところ、判明した。昔の魔術書に何かヒントが無いか探してみたら、

なんと！

その病気を治すには「エルフの愛液」が必要であることがわかった！

デイーのリットは長い間悩むが、

いとしのパロンの意識が戻るまでその身をスレオンに預けることを決心した……



今回は「販あり・難なし」の二種類を収録！
お好みで選んでください。



『本当にいいのですね？』
魔術師の声が暗い石壁に反響する…
『これでパオンが助かるのなら…』



『わかりました…
あなたにそこまでの覚悟があるのなら
私には断る理由がありませんね』

『こ、これでいいのかしら…？』
股を大きく広げて恥ずかしそうに
魔術師の視線をそらすディーオリット…

『でもわざわざこんな格好をしなくても…』

『これは特殊な方法で採取しなくては効果が
薄くなってしまうです。』

『そう…
ならしやうがないわ…』

『エルフの愛液は絶頂を迎えた瞬間が
その効果がもつとも高いと、私の持っている魔術書に書いて
ありました。』

『だ： ダメエ：
これ以上は： 恥ずかしくて死んじゃいそう：』

『しよ：うが：ないです：ねえ：
これではパ：オンの状態がよくなりませ：んよ。
パ：オンがあ：のままになっ：てもいいと：いうのですか？』

『あ：：：ッ！』

『ま：あ い：いでしよ：う。
今日のとこ：ろはこれぐ：らいで。
次はこの次：の段階にい：きますから。』

『わ：： わか：ったわ：：』

〜2日目〜

昨日とは違う場所。
再びデイトーリットはスレオンの前に
羞恥な姿をさらしている。

『ふふ

昨日よりはだいぶ良くなりましたね。

ほら ココの感度が良くなっていますから。』

スレオンのごつごつした指がデイトーリットの
秘部へと伸びる。
すでにぬらぬらとした液体が見え隠れしていた。

『あ… ああ…

恥ずかしいわ… スレオン…』

『大丈夫ですよ。

すぐに良くなりますからね。

ふふふ…』

『あッ？ スレオン… 一体なにを！』

『ふふ…』

より良い状態の愛液を採取する為の行為です。
大丈夫 リラックスしてください。すぐに良くなりますから』

『あっ！ ああんッ！』

『さすがはハイ・エルフですね。
さっきから私の肉棒に絡みついて放さないですよ』

『スレオン！ やめてッ！
こんなこと… おかしいわ！』

『おや？ 異なることをおっしゃいますね。
もともとはあなたが望んだことではなかったのですか？』

『そ… それはそうだけど…』

『ふふ… 大丈夫ですよ。
すぐに済みますから』



『ふあッ！
あッ！ ああッ！！』

『おふおう！』

この膣中の感触… やみつきになりますね。
パオンはいつもこのようにことをしていたのですかね』

『うああッッ！！！！
で…出るッ！！』

『ああ… 膣中に出てるう…』

『すみませんねえ…
あまりにもあなたの膣中が気持ち良くて
暴走してしまっただけです』

〜3日目〜

『お待たせしましたね。
今日は愛液を採取できるように努力をしましょう。
そろそろパ○ンの症状も気になりますしね』

『そうね：
早くお願いするわ…』

『ふふふ： 大丈夫ですよ。
何も心配することはありません。
今日は助っ人も呼んでありますから…』

『え？ 助っ人…？』



『あ、あなたたちは…』

『ああ… 胸を…』

村人たちの手が一斉にディーオリットの乳房に集中する。

『そうです。ザクソンの村人たちですよ。
事情を説明したら 皆さん快く引き受けてくれましたね』

『ふふ…
さあ はじめましょうか。』

すでに準備の整っていたデイーオリットの秘部に
村人の一人が激しく肉棒を突き入れた！

『おおっ！』

これが… デイードさんのおまんこか！
し… しぼりとられそうだ…ッ！』

『はあん… いいわあ…
今日はうまくいきそうな気がする』

昨日とは違ってかわって
恍惚な表情を見せ始めたデイーオリット。



『薬の量が多すぎたのかもしれないね…
昨日よりも感度が良すぎる』

村人たちの肉棒がかわるがわるデイー○リットの膣中に
埋没していく…
その度にデイー○リットの表情が一変していった。

『あひっ！』

幾度となく村人たちの射精を体の奥底で
感じ取っていくデイー○リット…

『これは…
彼女の意識が半分飛んでしまっていますね…
これではエルフの愛液が取れないかもしれませんね…』

完全に意識が飛んでしまったデイーオリット…
その糸の切れた操り人形のようにになった体に村人たちの
射精が何度も続いた…

『スレオン先生…
俺たち やり過ぎましたかね？』

『ふふ… 大丈夫ですよ。
これくらい壊れてもらえば、後が楽ですから。
また よろしくお願いしますね。』

へへへ！
スレオン先生の実験なら喜んでお手伝いさせてもらいますよ。
そのおかげでこんな上等なモンを抱けるんですからね』



『本当にいいのですかね？』
魔術師の声が暗い石壁に反響する…
『これでパオンが助かるのなら…』



『わかりました…
あなたにそこまでの覚悟があるのなら
私には断る理由がありませんね』

『こ、これでいいのかしら…？』
股を大きく広げて恥ずかしそうに
魔術師の視線をそらすディーオリット…

『でもわざわざこんな格好をしなくても…』

『これは特殊な方法で採取しなくては効果が
薄くなってしまうです。』

『そう…
ならしやうがないわ…』

『エルフの愛液は絶頂を迎えた瞬間が
その効果がもつとも高いと、私の持っている魔術書に書いて
ありました。』

『だ： ダメエ：
これ以上は： 恥ずかしくて死んじゃいそう：』

『しよ： がないですねえ：
これではパ○ンの状態がよくなりませんよ。
パ○ンがあのままになってもいいというのですか？』

『あ：：：ツ！』

『まあ いいでしょう。
今日のところはこれぐらいで。
次はこの次の段階にいきますから。』

『わ： わかったわ：』

2日目

昨日とは違う場所。
再びデイトオリットはスレオンの前に
羞恥な姿をさらしている。

『ふふ

昨日よりはだいぶ良くなりましたね。

ほら ココの感度が良くなっていますから。』

スレオンのごつごつした指がデイトオリットの
秘部へと伸びる。
すでにぬらぬらとした液体が見え隠れしていた。

『あ… ああ…

恥ずかしいわ… スレオン…』

『大丈夫ですよ。

すぐに良くなりますからね。

ふふふ…』

『あッ？ スレオン… 一体なにを！』

『ふふ…』

より良い状態の愛液を採取する為の行為です。
大丈夫 リラックスしてください。すぐに良くなりますから』

『あっ！ ああんッ！』

『さすがはハイ・エルフですね。
さっきから私の肉棒に絡みついて放さないですよ』

『スレオン！ やめてッ！
こんなこと… おかしいわ！』

『おや？ 異なることをおっしゃいますね。
もともとはあなたが望んだことではなかったのですか？』

『そ… それはそうだけど…』

『ふふ… 大丈夫ですよ。
すぐに済みますから』



『ふあッ！
あッ！ ああッ！！』

『おふおう！

この膣中の感触… やみつきになりますね。
パオンはいつもこのようにことをしていたのですかね』

『うああッッ！！
で…出るッ！！』

『ああ… 膣中に出てるう…』

『すみませんねえ…
あまりにもあなたの膣中が気持ち良くて
暴走してしまっただけです』

〜3日目〜

『お待たせしましたね。
今日は愛液を採取できるように努力をしましょう。
そろそろパオンの症状も気になりますしね』

『そうね：
早くお願いするわ…』

『ふふふ： 大丈夫ですよ。
何も心配することはありません。
今日は助っ人も呼んでありますから…』

『え？ 助っ人…？』



『あ、あなたたちは…』

『ああ… 胸を…』

村人たちの手が一斉にディーオリットの乳房に集中する。

『そうです。ザクソンの村人たちですよ。
事情を説明したら 皆さん快く引き受けてくれましたね』

『ふふ…
さあ はじめましょうか。』

すでに準備の整っていたデイーオリットの秘部に
村人の一人が激しく肉棒を突き入れた！

『おおっ！』

これが… デイードさんのおまんこか！
し… しぼりとられそうだ…ッ！』

『はあん… いいわあ…
今日はうまくいきそうだな気がする』

昨日とは違ってかわって
恍惚な表情を見せ始めたデイーオリット。



『薬の量が多すぎたのかもしれないね…
昨日よりも感度が良すぎる』

村人たちの肉棒がかわるがわるデイー○リットの膣中に
埋没していく…
その度にデイー○リットの表情が一変していった。

『あひっ！』

幾度となく村人たちの射精を体の奥底で
感じ取っていくデイー○リット…

『これは…
彼女の意識が半分飛んでしまっていますね…
これではエルフの愛液が取れないかもしれませんね…』

完全に意識が飛んでしまったディーオリット…
その糸の切れた操り人形のようにになった体に村人たちの
射精が何度も続いた…

『スレオン先生…
俺たち やり過ぎましたかね？』

『ふふ… 大丈夫ですよ。
これくらい壊れてもらえば 後が楽ですから。
また よろしくお願いしますね。』

へへへ！
スレオン先生の実験なら喜んでお手伝いさせてもらいますよ。
そのおかげでこんな上等なモンを抱けるんですからね』

